



Middle East within Asia

Booklet Series

*No.1 (2007.3)*

# 世界史を取り戻そう

消えていく前近代世界（イスラーム、中世ヨーロッパ）

鈴木 久男

ニーズ対応型地域研究推進事業

アジアのなかの中東：経済と法を中心に

# 世界史を取り戻そう

—消えていく前近代世界（イスラーム、中世ヨーロッパ）—

鈴木 久 男

## 1 「世界史」が置かれている状況

2006年10月末に発覚した高校必修科目「世界史」の未履修問題は大きな社会的関心事となったが、それに先立つ三週間程前、この問題が何をもたらすのかを予感していたかのような内容の投稿が朝日新聞の「声」の欄に掲載されていた。投稿者は北海道で高校の音楽講師を務める女性。彼女の意見の一部を引用させていただく、次の様である。

……最近驚かされることが多い。ミュージックカル「サウンド・オブ・ミュージック」の時代背景を説明しようとして、「1930年代の終わりの頃は、日本でいうと何時代ですか」と聞くと、「明治時代！」と元気な声。「えっ」と絶句していると、「ヒトラーがいた頃なんだから江戸時代でしょ」と別の声。本を読まなくなつた。世界史と日本史を対

応させることができる子などは、とても少なくなつた。……

（朝日新聞2006年10月2日「声」の欄より）

投稿の主旨は別のところにあるのだが、引用したこの箇所は長年に亘り中学校や高等学校で歴史教育に携わってきた私に、他人事とは思えないほどの切実な問題として強く迫ってくる。確かに私の経験からいっても、投稿者が言うように、ここ10年くらいの間、世界史（外国史）の出来事を同時代の日本史と関連づけて理解できる中学生や高校生の数が減少しつつあることを感じる。しかし問題はそんなレベルにとどまらない。もつと根本的な問題が歴史教育の現場では起こっているのである。それは多くの世界史担当教師が頭を悩ましているのだが、世界史を学ぶ前の生徒が持つ世界史（外国史）の既有知識が年々乏しくなつてきているこ

とである。(中学校で習っているから) 高校生であれば知っているはずの世界史の内容が身につくについていない、という話を研究会等でよく耳にするようになった。実は最近私もある高校の世界史公開授業で、海のネットワーク成立の歴史を学ぶ生徒が、マルコ・ポーロの見聞をまとめた書物の名を答えられずに困惑している姿を目の当たりにして、ことの重大さを改めて痛感したばかりである。『東方見聞録』(世界の記事)は中学生でも知っているはずだが……、現実には思うようにはなっていない。さらに高校三年生になって選択世界史を選ぶ生徒が減少してきているという話も多く聞かれるようになってきた。そしてここへきての世界史の未履修問題の発覚。どうも世界史が置かれている状況は芳しくない。

こうした世界史教育の実態から考えても先の投稿者の主張は的を射ている。そしてこの主張を真摯に受け止め、世界史をめぐる現状を等閑視することなく冷静に分析し解決策を様々な角度から見いだしていくことは、歴史教育に長年関わってきた者の責務と考える。

一体世界史教育でどのような状況が生じてきているのはどこにその問題があるのだろうか。それを考えていくには、我が国の歴史教育

で世界史がどう扱われあるいはどう位置づけられてきたかについて、ていねいに分析していくことが必要だろう。その場合、分析対象を高校世界史教育にすることは常道であろうが、あえてここでは別の切り口からこの問題に迫ってみることにする。それは私の中学校や高等学校で歴史教育に関わった経験から、高校世界史の基礎力形成を担う中学校歴史教育にむしるこの世界史をめぐる問題が内在していると考えられるからである。そこでここからは中学校歴史教育を中心に話を進めていくことにする。

## 2 中学校社会科歴史的分野

### ―その相対的独自性―

中学校社会科歴史的分野について、かなり前からこの教科の実像がどうも世の中に正確に伝わっておらず、誤解されているのではないかと考えていた。そしてここに来てその認識があるながち間違っていないなかつたということ。次のような事実から再確認したのである。例えば勤務先の二〇代の教職員に尋ねてみると、中学校時代の歴史学習は「日本史」だと思っていた、という答えが全員から返ってきた。さらには「未履修問題」について論じたある識者の文中に「中学の日本史教科書」という表現が使われ

ていた。しかしこれらはすべて中学校社会科歴史的分野に対する誤った解釈であって、実態を表していない。じつは中学校社会科歴史的分野は、日本史だけから構成されているのではなく、日本史と世界史（外国史）を総合的に学習できるように教科内容になっているのである。このことは昔もそして今も変わっていない。そしてそれは高校地理歴史科の教科構造が科目並列型をとり、「世界史」と「日本史」が別個に履修されていることと明らかな違いを示している。

この事実は軽く見られそうだが、日本史と世界史からなる教科内容を実践において有効に利用すれば、中学校の歴史教育は国際化やグローバル化する現代社会に対応する教育を展開できる可能性を持っているのである。そこに中学校社会科歴史的分野が本来持つ歴史教育における相対的独自性があると私は考えている。そこでいましばらく中学校歴史教育を眺めながら世界史をめぐる問題に徐々に踏み込んでいこうと思う。中学校社会科歴史的分野が日本史と世界史（外国史）からなる教科内容を最初に示したのは、今日の中学校社会科の内容構成「地理、歴史、政治経済（公民）」の枠組みを作ったといえる1955年（昭和30年）『中

学校学習指導要領 社会科』（以下『55要領』とす。1977年告示の中学校学習指導要領 社会科は『77要領』というように、以降の学習指導要領もこの略記に準ずる）からであった。この国家による教科の目標や具体的内容、方法を示した『55要領』では、社会科の目標を四つあげ、そのなかの目標2において

「……日本の歴史ばかりでなく、世界史的な内容も通して、日本史に関するものを主体としながらもそれとの関連において世界史の流れをとらえ、結果においては、その時代系列のあらましがつかめるようになる。……」

とし、日本史と世界史に関する内容を取り入れた歴史的分野の学習が新たに構想された。

さらに新たに登場した歴史的分野は、その具体目標2で

「日本の歴史を世界史との関連や比較において考える態度を養い、日本の歴史の独特の発展の姿を理解させると同時に、広く世界各地の人類の歴史的活動の底には、共通な発展の姿や人間的感情や意欲があることを理解させ、今日の社会生活上の諸問題を、世界史的な広い視野から理解していく態度を養う。」

という目標を掲げ、我が国の歴史をそれを取り巻く世界の歴史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界史的な広い視野から理解していく態度を育成するという姿勢を打ち出した。ここにおいて、日本史と世界史（外国史）を総合させた歴史的分野が1955年から中学校教育で始まったのである（1）。この『55要領』をもう少し検討してみると、社会科の目標2から、この時代は自国史中心の歴史教育を排除し、我が国の歴史に関連する世界史をも取り込んだ歴史教育を積極的に推し進めようとする姿勢がうかがえる。さらに歴史的分野の具体目標からは世界史的視野から現代日本の諸問題に目を開かせ、日本社会の課題を考察していくことも期待されていることが分かる。そしてこの姿勢は歴史的分野の内容にも反映され、日本史を同時代の世界史（外国史）と比較させながら理解させる指導を打ち出し、比較対象の時代、地域については特定なものに限定しようとはせず、あらゆる時代、地域を対象としている。このことは『55要領』の随所に見られる次のような文言がよくそのことを物語っている。「世界の古代諸文明のあらましと比較しながら」「アジアの古代の歴史を背景に理解させる」「武士が勢力を得て、社会が変

わっていくありさまを、外国と比較しながら、理解させ」「ヨーロッパ近代国家の発足と比較しながら」等、日本史を世界史の中で相対化することを通して理解させようとする強い姿勢がうかがえる。

1955（昭和30年）から始まった歴史教育は、従来の自国史中心の一国的歴史理解を脱し、広く世界史的視野に立って日本の動きを世界の動きの中で捉えていくという新たなしかも中学校教育独自の構想であった。その上さらにこの構想は、今日の国際化社会を生きるために必要な態度、すなわち一方から世界を眺めるのではなく世界の中の自分という視点で人やものを見たり考えたりする態度の育成を先取りするかのような先見性を持っていた。

そしてこの『55要領』の目標の趣旨はその後の学習指導要領改訂においても概ね受け継がれ、日本史を世界史との関係において考え学ぶ中学校社会科歴史的分野の独自性は一見保たれているように思われてきた。ところが、歴史教育の場で教師も生徒も一番関わりの深い教科書を眺めていくと、世界史に関わる内容が年を経るごとに徐々に削減されている実態が浮かび上がってきたのである。

### 3 世界史的内容の減少

#### ―消えていく前近代―

中学校歴史的分野の教科書で何が起こっているのか。まず、世界史的内容の記述量を中心に検討していくことにしよう。次の表1は1966年（昭和41年）から2006年（平成18年）の四十年間に発行された教科書における世界史的内容の割合を示したものである。

「表1」教科書（中学校社会科歴史的分野）における世界史的内容の割合（対全ページ数比）

発行年	出版社	世界史的内容：全ページ	対全ページ数比
1966年	A社	105頁	30.9% (34%)
1977年	B社	97頁	30.9% (31%)
1980年	C社	101頁	30.5% (33%)
1981年	C社	92頁	32.2% (29%)
1981年	D社	73頁	28.5% (25%)
1993年	D社	89頁	30.5% (29%)
1997年	C社	76頁	30.0% (25%)
1997年	E社	68頁	29.1% (23%)
2002年	C社	31頁	19.5% (16%)
2006年	C社	37頁	21.5% (17%)
2006年	F社	52頁	23.5% (22%)
2006年	G社	43頁	23.6% (18%)

ABCDEF Gは出版社

表1に見られるように歴史的分野の教科書における世界史的内容の割合は、1980年頃までは30%を超えていた。しかしその割合は漸次減少傾向を示し、表が示すように四十年の間に半減してしまったのである。1955年に世界史的内容を新たに取り入れ、日本史を世界史との関連や比較において考える歴史教育は、時代の進行とともに世界史を削減し日本史を主体とする内容にその姿を変えていくこととなった。ところが誰の目にも明らかなことだが、この四十年間の日本社会はむしろ世界史的内容を必要とする方向へ、つまり国際化・グローバル化社会へと変化進展している。世界は相互依存関係の状況を深め、国際問題は即国内問題となり、場合によっては国内問題が国際問題化することも起こりえる時代となった。世界のありようや歴史を学び活かしていく必要の時代を迎えているのである。それにもかかわらず削減は続いている。

さらに世界史的内容の中で、時代や地域について教科書の記述量を検討していくと新たな別の状況が明らかになってきた。次の表からそれを考えてみたい。

「表2」中学校社会科歴史的分野における4世紀～16世紀 スラーム世界と西ヨーロッパ世界に関する記述量（ページ

年	出版社	イスラーム世界	西ヨーロッパ世界
1966	A	1.5	16
1977	B	2	14
1980	C	1.5	14
1981	C	2.5	11
1981	D	0.5	9
1993	D	6	8
1997	C	1	9
1997	E	2	8
2002	C	0	2
2006	C	0.5	2
2006	F	2	2
2006	G	1	3

数)

世界史的内容の割合の減少は特に前近代世界に顕著に表れ、とりわけイスラームと西ヨーロッパは表2の数値が示すように大幅な削減となり、イスラーム世界は教科書によっては消滅に近い状況にある。このように四十年の間に中学校歴史教育において世界史に関する内容が漸次削減され、さらに特定の時代や地域が教えられないという事態が生じてきているので

ある。国際化社会が進行する中でこの現状は見過ごすことはできない多くの問題を含んでいる。それは国際化のなかで歴史的條件・価値観など様々に異なる他者と共存できるために、生徒自身が「ひとやもの」の見方・考え方を広げていくための道筋を妨げるものになりはしないかどうか。さらに特定の時代、地域を教えない教育（＝特定の時代、地域を中心に教える教育）は、世界認識に偏った価値観をもたらす危険性を持ち、そしてそれは生徒の意識に反映し、常識を形成する年代に達した中学生の世界像をよりステレオタイプ化していくのではないか。また世界史的内容の削減によって、高校地理歴史科「世界史」との間に圧倒的な情報量の差を生み出し、それが高校入学後の生徒の「世界史」履修に対する抵抗になっていないかどうか。昨年（2006年）10月末に問題化した必修科目「世界史」未履修にもこの「削減」が関係していることは否定できない。世界史担当教師が世界史を学ぶ前の生徒が持つ関連知識の乏しさに頭を悩ますことが多くなってきたと前に書いたが、生徒の立場から言えばそもそも関連知識を歴史教育の中で獲得する機会が削減されてしまったのである。このことを具体的に教科書の記述から検討してみると、世界史

に関して中学校と高校の情報量の差は驚くほどである。表2のデータと比較するために高校世界史Bの教科書における前近代（中学校との比較のためイスラーム世界、西ヨーロッパ世界を抽出）の記述量の経年変化をみてみよう。

「表3」高等学校社会科、同地理歴史科「世界史B」における4世紀～16世紀のイスラーム世界と西ヨーロッパ世界に関する記述量（ページ数）

年	出版社	総頁数	イスラーム世界	西ヨーロッパ世界
1971	a	361	9	48
1974	b	305	12	46
1985	b	345	13	46
1986	a	357	18	48
1986	c	273	13	28
1994	d	349	25	31
1996	c	365	15	42
1997	e	356	24	37
1998	f	359	24	45
1999	d	351	23	46
2003	d	354	20	46

表3から明かなように、前近代のイスラーム世界と西ヨーロッパ世界の記述は中学校教科書が漸次減少しているのに対して、高校教科書はここ三十年間、記述量に著しい変化はなくイスラーム世界にいたっては増加傾向にある。ここに中学と高校の世界史教育の不連続状況をみることができる。さらにこの不連続の実態をもう少し詳しく眺めるために、中学と高校の教科書における近代以前のイスラーム世界と西ヨーロッパ世界の中から「7, 8世紀のイスラーム社会」「イスラーム文化」と「西ヨーロッパ中世都市」を取り出し、それぞれの単元で使用された用語を比較したのが次の表4・1、表4・2である。対象とした中学、高校の教科書はそれぞれ1960年代後半から70年代初期、1980年代、2000年代のものである。

「表4・1」「7, 8世紀のイスラーム社会」・「イスラーム文化」

中学校教科書（1966年A社）	
イスラム帝国	アラビア 商業都市
メット	キリスト教 ユダヤ教
アラビア半島	征服 西アジア 中央アジア
	メッカ マホ



北アフリカ イベリア半島 サラセン帝国 バクダ  
 ッド ヘレニズム文化の遺産 地理学 数学 天文  
 学 化学 インドの数字 アラビア数字 千夜一夜  
 物語

**高等学校教科書（1971年 a社）**

アラビア半島 セム語族 ビザンチン帝国 ササン  
 朝 ペルシア 東西交通路 中継貿易 メッカ メジ  
 ナ カーバ（聖殿） キリスト教 ユダヤ教 マホ  
 メット アラー ヘジラ イスラム暦 アラビア半島  
 イスラム教 コーラン 絶対帰依 偶像崇拜禁止  
 サラセン帝国 大食 カリフ 異教徒 人頭税（ジ  
 ズヤ） イスラム教徒（モスレム） アリー ムア  
 ウィア ダマスカス ウマイヤ朝 世襲制 シーア  
 派 スンニー派 エジプト 北アフリカ イベリア半  
 島 ゴート王国 フランク王国 ツール・ポアチ  
 エ アラビア人中心主義 アッバース朝 バクダッド  
 タラス川 唐 製紙法 後ウマイヤ朝 コルドバ  
 イスラム文化 商業算術 代数学 アラビア数字  
 零の概念 天文学 物理学 錬金術 アルカリ ア  
 ルコール イブン・ハルドゥーン イブン・バツ  
 タ 三大陸周遊記 千夜一夜物語 モスク アラバ  
 スク アルハンブラ宮殿 ギリシア文化の保存

**中学校教科書（1980年 C社）**

アラビア半島 遊牧生活 オアシス メッカ マホ  
 メット イスラム教（回教） アラー 絶対的服従  
 コーラン ユダヤ教 キリスト教 サラセン帝国 後  
 継者 イスラム帝国 東西貿易 ヘレニズム イスラ

ム文化 数学 インドの数字 化学 医学 薬学 天  
 文学 ラテン語

**高等学校教科書（1985年 b社）**

ビザンティン帝国 ササン朝 アラビア半島 東西  
 貿易 メッカ 国際中継貿易 マホメット 唯一神  
 アラー 預言者 イスラム教 メディナ ヒジュラ  
 イスラム暦 神殿カーバ コーラン 絶対的服従  
 キリスト教 ユダヤ教 カリフ アラブ人 シリア  
 エジプト アリー シーア派 ムアウィヤ ダマ  
 スクス ウマイヤ朝 正統カリフ ソグディアナ  
 北アフリカ イベリア半島 西ゴート王国 フラン  
 ク王国 トウルル・ポワティエ間の戦い 地租（ハ  
 ラージュ） 人頭税（ジズヤ） アッバース朝 バグ  
 ダッド ハールーン・アッラシード イラン人の登用  
 官僚制度 正統派（スンニー派） イスラム法 後  
 ウマイヤ朝 コルドバ モスク 融合文化 千夜一夜  
 物語 イラン・イスラム文明 トルコ・イスラム文  
 明 インド・イスラム文明 細密画 アラベスク  
 イブン・ハルドゥーン 医学 天文学 幾何学 光  
 学 地理学 アラビア数字 アルコール アルカリ  
 アルジェブラ アルケミー（錬金術） 零の観念 代  
 数学 三角法 アリストテレス哲学 イブン・シーナ  
 遠隔地貿易 隊商貿易 商船貿易 南ロシア  
 内陸アフリカ アフリカ東岸 東シナ海 タージ  
 （大食） イブン・バットゥータ タラス河畔の戦  
 い 製紙法 砂糖 木綿

**中学校教科書（2002年 C社）**

記述なし

**高等学校教科書（2003年 b社）**

アラビア半島 遊牧 隊商 ササン朝 ビザンツ帝  
 国 絹の道 海の道 アラビア半島 西南部 メッカ  
 中継貿易 クライシユ族 ムハンマド 唯一神アッ  
 ラー 預言者 イスラーム教 メディナ ムスリム  
 共同体 ヒジュラ（聖遷） ヒジュラ暦 太陰暦 カ  
 ーバ コーラン アラビア語 絶対的服従（イスラ  
 ーム） ユダヤ教 キリスト教 啓典の民 カリフ  
 ジハード シリア エジプト アリー ムアーウィヤ  
 ダマスクス ウマイヤ朝 正統カリフ シーア派  
 スンナ派 インド西部 ソグディアナ 北アフリカ  
 イベリア半島 西ゴート王国 トウル・ポワティ  
 エ間の戦い ジズヤ ハラージュ イスラム帝国  
 新改宗者（マワリー） アッバース朝 マンスー  
 ル バクダード 官僚制度 イスラム法（シャー  
 リア） コルドバ 後ウマイヤ朝 ハールーン・ア  
 ッラシード サーマン朝 トゥールン朝 イスラ  
 ーム文明 都市文化 普遍的文明 イラン・イスラ  
 ーム文化 トルコ・イスラーム文化 インド・イス  
 ラーム文化 スペインのトレド ラテン語訳 ギリ  
 シア文明の橋渡し ウラマー モスク 学院（マ  
 ドラサ） 市場 羊皮紙 タラス河畔の戦い 製紙法  
 サマルカンド カイロ 神秘主義 歴史家タバリー  
 イブン・ハルドゥーン 『世界史序説』 ギリシア  
 語文献 医学 天文学 幾何学 光学 地理学 ア  
 ラビア数字 十進法 ゼロの観念 フワリズミ  
 代数学 三角法 錬金術 オマル・ハイヤーム ア  
 リストテレス哲学 イブン・シーナー イブン・ル  
 シュド 千夜一夜物語 イブン・バツータ 三大陸

周遊記 ミナレット 細密画 アラベスク

「表4・2」 「西ヨーロッパ中世都市」

**中学校教科書（1966年 A社）**

十字軍 西アジアとの交通 東西貿易 イタリア  
 ドイツ 都市同盟 領主支配 有力な商人、手工業  
 者 自治 ベネチア ジェノバ フィレンツェ  
 共和国 組合 ギルド 規約 羊毛商人 親方  
 職人 徒弟 活動のさまたげ

**高等学校教科書（1971年 a社）**

ローマ都市 荘園 交換経済 市 商人・手工業者  
 の定住 封建領主 封建的束縛 貨幣経済 ベネチ  
 ア ジェノバ フィレンツェ ピサ 自由都市 遠  
 隔地商業 共和制国家 リューベック ミュンヘン  
 ギルド 同職ギルド（クラフトギルド、ツunft）  
 市政参加 親方 職人 徒弟 市場独占 閉鎖的性  
 格

**中学校教科書（1980年 C社）**

ベネチア ジェノバ 東ローマ帝国 イスラムの国  
 マルコ・ポーロ 城壁 同業者組合（ギルド）商人  
 手工業者 自治都市

**高等学校教科書（1985年 b社）**

古代都市の衰退 荘園 自給自足経済 定期市 イ  
 スラム商人 ヴァイキングの商業活動 交換経済  
 都市の発展 商業ルネサンス（商業の復活） ヴェ  
 ネットイア ジェノヴァ ピサ 海港都市 香料  
 ミラノ フィレンツェ 内陸都市 毛織物業 遠隔

地商業 北ドイツ都市 フランドル都市 ガン  
 リュージュ ロンドン 北ヨーロッパ商業圏 地中海商業圏 シャンパーニュ ルーアン マルセイユ  
 リヨン ケルン マインツ ニュルンベルク 都市  
 の空気は自由にする 封建的束縛 司教、君主の居  
 住地 古代ローマ都市跡 自治都市 独立共和国  
 自由都市 ロンバルディア同盟 ハンザ同盟 商人  
 ギルド 同職ギルド 大商人の独占 親方 職人  
 徒弟 ギルド規約 アウグスブルクのフツガー家  
 フィレンツェのメディチ家 教皇 ルネサンス

中学校教科書 (2002年 C社)

記述なし

高等学校教科書 (2003年 b社)

余剰生産物交換 ムスリム商人 ノルマン人 貨幣  
 経済 遠隔地貿易 商業の復活 (商業ルネサンス)  
 地中海商業圏 ヴェネツィア ジェノヴァ ピサ  
 香辛料 ミラノ フィレンツェ 織物工業 北ヨ  
 ロッパ商業圏 北ドイツ諸都市 ハンブルク リ  
 ユーベック ブレーメン生活必需品 フランドル地  
 方 ガンブリュージュ ロンドン シャンパーニ  
 ュ地方 ニュルンベルク アウクスブルク 司教座  
 都市 特許状 自治権 自治都市 北イタリア コ  
 ムーネ 都市国家 ドイツ 自由都市 ロンバル  
 デリア同盟 ハンザ同盟 城壁 ギルド 商人ギル  
 ド 同職ギルド (ツンフト) ツンフト闘争 親方  
 職人 徒弟 自由競争禁止 規約 アウグスブルク  
 のフツガー家 フィレンツェのメディチ家 教皇

表4・1、表4・2の用語を比較したとき、

1960年代後半から70年代初めは中学と  
 高校の教科書に極端な差は見られない。ところ  
 が1980年代になると用語の数の差が明瞭  
 になり、2000年代には検証した教科書では  
 両者の情報量の差は圧倒的である。勿論生徒の  
 発達段階を考慮すれば、中学・高校間の世界史  
 に関わる情報量の差は当然考えられるが、それ  
 にしてもほぼ同時代の教科書で一方は「記述な  
 し」という情報差は正常とは言えまい。あらた  
 めて中学校社会科歴史的分野の世界史的内容  
 と高校地理歴史科世界史との間の不連続状態  
 を思い知らされる。

中学校歴史教育の教科書に見られる世界史  
 的内容の減少、この状況はなぜ生じてきたのか。  
 ここからは教科の目標や具体的内容や方法を  
 示し、教科書の記述に直接影響を及ぼす学習指  
 導要領(2)の考察を通して原因の一端を明ら  
 かにしようと思う。

4 世界史の取り扱われ方

(1) 1980年代初めまでの状況

すでに述べたが1955年(昭和30年)『中  
 学校学習指導要領 社会科』(『55要領』)はそ

の歴史的分野の具体目標において、我が国の歴史をそれを取り巻く世界の歴史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界的な広い視野から理解していく態度を育成するという姿勢を打ち出した。ここにおいて、日本史と世界史を総合させた歴史的分野が1955年から中学校教育で始まったのである。その際に日本史と世界史の内容割合をどうするかについては事前に議論されたようであるが、最終的には『55要領』『58要領』で言うように7対3とするのが適当と定められ、これが標準となり1970年代の終わりまでこの内容比率が教科書の記述量に反映された。したがって前掲の表1で示されたように1980年頃までの教科書は世界史的内容が30%を上回っていた。

一方1950年代～1980年代初めにかけては、歴史的分野の週当たりの授業時間数は5時間とされ、年間175時間が標準とされた。年間175時間という授業時間を確保できたのは、国語と社会科歴史的分野のみで、歴史教育の重要性を国が認めていたことがうかがえる。他教科と比べ多くの授業時間が確保できたことは、指導内容量にも反映し、この時期の教科書はA5版300ページを優に超すボリューム

ームであった。だから表4・1、表4・2で見たとおり用語数においても、高校「世界史」の基礎力形成を担うだけの配慮はなされていたと言っている。

ところが1980年を過ぎたあたりから世界的内容の割合が20%台さらには10%台へと減少し、特にここにかけて前近代は東アジア世界を除いた地域については消滅に近い状況になっている。こうした状況になる前の1950年代～1980年代初めの期間に、学習指導要領は都合三回の改訂が行われたが、その『55要領』『58要領』『69要領』を分析していくと「減少」「消滅」の要因が既に内在されていることに気がつく。その点について学習指導要領を改訂順に追いつながりながら見ていくことにする。『55要領』の持つ意義と目標の主旨についてはすでに述べたので、『58要領』と『69要領』について、世界史的内容の扱われ方を中心に以下整理してみよう。

① 『58要領』（1962年度から1971年度まで施行）

A 先行する『55要項』と比べ大きく変化したことは、社会科の目標にも歴史的分野の目標にも「国民としての自覚を高める」

「国民的心情の育成を図る」というように社会科歴史教育を通して日本人であることを意識させる方向性が提示されたことである。これは『55要領』がその具体目標で、比較や関連を考慮し日本史を世界の歴史の中で相対化すること通して理解させようとしたとは逆に、ここでは日本や日本人を強く押し出して、日本を基軸に世界を理解させようとする姿勢が明らかにされた。

B もう一つ大きく変化したのは、指導上の留意事項の(4)に見られる次の内容である。

「わが国の歴史を、世界史的視野に立って学習させることがたいせつである。特に中学校の生徒の発達段階においては、日本史と世界史を完全に分離して学習させることは、目標の達成上望ましくない。また、日本史に世界史的事象をしばしばさしはさんでその流れを中断することは、生徒の理解を困難にするおそれがある。したがって、日本に特に関係の深いこと  
がら以外は、適当に大きくまとめて学習させること(3)が望ましい。また、世界史  
の中では、特に近代世界の成立とその発

展に重点をおき、日本の近代化を考察する上に役だたせるように配慮することが重要である。」(傍線筆者)

C 目標の(4)で近代史の学習に重点をおくと明示され、内容については日本史を同時代の世界史と比較する際に、その時代や地域を近代に絞り込む傾向が強まった。

まず『58要項』では、Aにまとめたように日本史を世界の歴史の中で相対化し理解させようとする方向から日本を意識して世界を理解させる方向へと変化し、また日本人としての自分を意識させる目標が前面に押し出された。さらにBにあるような当時の歴史教育の実践レベルにおける現実的な問題解決のために、日本に特に関係の深い世界史の事項すなわち「近代史」の事項を重点に学習させ、それ以外(前近代の世界史)は大きくまとめて学習させるという指導法が示された。その結果Cで示したような傾向が強まり、「日本に特に関係の深いこと  
がら以外は」とされたイスラムやヨーロッパ中世の歴史はまとめられ、それぞれ武家社会の確立と近代世界の成立を学習する最初の単元に集約されている。内容の(5)近代世界の成  
立「近代ヨーロッパへの歩み」に関わる文言に

は、「指導にあたっては、ヨーロッパの中世社会に簡単に触れ……」という表現があるように前近代の軽視が明確になり、代わって日本の近代化理解のために世界史的内容は近代史重視にする方向が強まった。ここに来て、広く世界的視野に立って日本の動きを世界の動きの中で捉えていくという歴史教育は、日本を基軸に日本史に関係深い世界のことがらを中心に捉えていく姿勢へとその方針を大きく変化させたと言っている。この『58要項』の変化が、結論を先取りすればその後の中学校歴史的分野における世界史的内容の位置付けを大きく規定していくことになるのである。

② 『69要項』（1972年度から1980年度まで施行）

A 目標において、先行する学習指導要領が掲げた「わが国の歴史を世界史的視野に立って学習させる」（第2学年歴史的分野の目標）という文言が「世界の歴史を背景に、広い視野に立って日本の歴史を理解させる」（歴史的分野目標）（傍線筆者）に変えられている。これは世界的視野に立って、即ちわが国の歴史を国際的歴史環境の中に置いて理解させるという意味合いが強

かった従来の目標から、世界の歴史は背景に置くようにし、日本史の視野に入ってくる世界史関連事象だけを取り上げ日本の歴史を理解する目標へと大きく変化したことを意味している。

B 目標を受けて内容にも変化が見られる。先行する『58要項』から始まった「近代史」の学習に重点を置く姿勢はより強まり、近代以前の4世紀から16世紀のイスラームとヨーロッパ世界の歴史はまとめられ、「ヨーロッパ世界の形成」という大項目のなかに集約された。なお、わが国の古代、中世に関係の深い東アジアの歴史は、関係する日本史とともに学習されるように設定されている。

『69要項』で日本に特に関係の深いことから以外は、適当に大きくまとめて学習させる方向がより強まったため、日本史と世界史を同時代的に理解する機会が狭められたと言っている。具体的には従来は、随・唐の時代とイスラーム成立期そして聖徳太子・律令制度の時代が教科書において同じ単元で扱われたが、Bで示したようにイスラーム世界はヨーロッパ世界とともに前近代史とし

て大きく括られ、日本史との同時代史的把握が難しくなり、文字通り背景に押しやられてしまった。

## (2) 1981年以降の状況

1955年以降、中学校の社会科歴史教育は、我が国の歴史をそれを取り巻く世界の歴史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界史的な広い視野から理解していく態度を育成することを目標に掲げ、ここに日本史と世界史を総合させた歴史的分野が始まった。しかし、以後二回の学習指導要領改訂を経て、その目標と内容において方針転換が起こり、日本史を比較や関連を考慮して世界の歴史の中で相対化することを通して理解させようとする姿勢から、日本を基軸に世界を認識する方向に歴史教育が変化し始めた。それに伴って、日本史の流れを軸にこれに直接関係する世界史的内容が重視され、近代以前の世界史は比較したり同時代史として理解させたりすることから次第に除かれることとなった。そしてこの傾向は1981年以降から施行された学習指導要領でさらに強まり、その結果、歴史的分野から世界史的内容の大幅な減少が生じることとなったのである。その実態を『77要領』か

ら順に考察していくことにする。

### ① 『77要領』(1981年度～1992年度まで施行)

A 先行の『69要領』は現代化・科学化力リキュラムといわれ、科学・技術の高度な発達に対応する教育が要請され、教育現場では密度の濃い内容を大量に教えることとなった。その結果、授業内容の理解不十分な児童、生徒が増加し、やがて1970年代半ばからの「教育荒廃」へと進んでいった。こうしたことの反省の上に、『77要領』は改善のねらいの一つに「ゆとりある学校生活」が取り上げられ、社会科においても学習内容と授業時数が削減された。歴史的分野の授業時数は175時間から140時間となり週当たり4時間配当となった。さらに内容については、日本史と関係の薄い前近代の世界史的内容が削られ、相対的に日本史の内容の割合が増加した。また従来、近代以前の4世紀から16世紀のイスラームとヨーロッパ世界の歴史は「ヨーロッパの形成」という大項目にまとめられていたが、「天下統一の歩み」という大項目のなかの小項目に整理され

②

『89要領』（1993年度～2001年度まで施行）

A 目標や内容の文言から、我が国の歴史を世界の歴史を背景に理解させようとする趣旨を再度明らかにしようとしているこ

てしまった。

『77要領』の改訂は、教科書の記述量に反映し表1に見られたように、1981年以降、世界史の内容のページ数の割合は20%台に落ち込み、近代以前のイスラーム世界、ヨーロッパ世界の記述量も徐々に減少し始めた。

B 先行する『69要項』において打ち出された、歴史的分野は地理的分野と第1、2学年を通じて並行して学習されることという方針が定着し、第1学年では近代以前の日本および世界の歴史が学習対象となった。内容の取り扱いでは、1学年生徒の発達段階を考慮し、具体的な事象や事物の学習を中心として、抽象的かつ高度な内容、複雑な社会構造など深入りしないように配慮する必要があるとされたため、近代以前の世界的内容はますます授業において軽く扱われるようになった。

③

『98要領』（2002年度施行）

A 目標の（1）に、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てるという文言が挿入され、かつてのように現代社会の諸問題を解決するために歴史を学ぶという目的は姿を消し、自国の歴史を愛するために学ぶという趣旨が色濃くなった。

B 内容では、近代以前の歴史におけるイスラーム世界は完全に姿を消し、ヨーロッパ

とは読みとれるが、世界史の内容は日本史と関係の深い事項に、より精選されている。内容の取り扱いでは、近代以前のイスラームとヨーロッパ世界の歴史は、ヨーロッパ世界とイスラーム世界のかかわり及びヨーロッパ人が来航した背景を中心に理解させるように留意する、とされこの時代の歴史事象にかかわる内容が大幅に削減された。（傍線筆者）

B 東アジア世界を除く前近代の大幅な削減は、1994年度より高校にて「世界史」が必修となること念頭に置くと、前近代は高校で学ぶことができるといふ考えからきているとも解釈できる。



世界もヨーロッパ人の日本来航について理解させ、さらにその文化の伝来が我が国の社会に及ぼした影響について考えさせるにとどまり、ヨーロッパ中世の歴史は扱われなくなつた。また、内容の取り扱いにおいて、世界の歴史については、我が国の歴史を理解する際の背景として我が国の歴史と直接かかわる事柄を取り扱うにと

どめること、とされ東アジア以外の前近代世界は事実上除かれることとなつた。さらに「ヨーロッパ人の来航」の背景については、新航路の開拓を中心に取り扱い、宗教改革については深入りしないようにすること、となりルネサンス、宗教改革は文字通り軽くさわる程度の学習で済まされてしまふようになつた。(傍線筆者)

C 完全週5日制が実施され、ゆとりの中で特色ある教育を展開し、生きる力を育成することをねらいとした学習指導要領で、学習内容の厳選、学び方を学ぶ学習の充実、社会の変化に対応できる力、等が求められた。その結果、歴史的分野の授業時数はさらに削減され、年間105時間となり週時間は3時間となつた。

『98要領』の改訂は、教科書の記述量

に反映し表1に見られたように、2002年以降、世界史的内容のページ数の割合はついに10%台に落ち込み、近代以前のイースラーム世界やヨーロッパ中世世界は教科書によつては記述がなくなり、ヨーロッパ世界(新航路の開拓の時代)の記述量も2ページへと落ち込んだ。

④ 『2003要領』(一部改訂)

A 『98要領』が学習内容の大幅な削減を図つたため、学力低下の問題が社会的に取り上げられた。そうした動きへの対応策として「確かな学力」を育成し、「生きる力」を育むという新学習指導要領の定着を進めるため一部が改訂された。

B 学力低下の懸念から生じた社会の批判を受け、文部科学省は「学習指導要領は最低基準」という見方を示した。具体的には指導計画の作成と各分野にわたる内容の取り扱いに次の文言が加わつた。

第2の内容の取り扱いのうち内容の範囲や程度等を示す事項は、すべての生徒に對して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において特に必要がある場合には、この事項にかか

わらず指導することができると。(傍線筆者)  
C この一部改訂後の教科書(4)を改訂前(2002年)発行の同一出版社の教科書と比較して見ると、前近代のイスラームについての記述が約半ページの分量で新しく加えられている。ただし「三大宗教と日本のかかわり」「古代文明と現在とのつながり(暦の発達)」という特設の単元での扱いで、授業で学習される保障はない。イスラームについての記述は以下の通りである。

イスラム教は7世紀にアラビアのムハンマドが始めた、唯一の神アラーを信仰する宗教で、その教えは「コーラン」に記されています。イスラム教徒には、1日5回の聖地メッカに向かつての礼拝といった義務があります。イスラム教は、北アフリカからインドネシアに至る広い地域に広がり、日本に本格的に入ってきたのは明治時代です。

また、「ヨーロッパ人の世界進出」の記述のなかに、「すでにイスラム商人が貿易をさかんに行っていたアジアの海域で、ポ

ルトガル人は中継貿易にのり出し……」という文言が加わり、イスラム商人をこの一箇所のみだけに登場させている。

## 5 歴史的分野の再生を目指して

1955年(昭和30年)中学校社会科歴史的分野はその目標において、我が国の歴史をそれを取り巻く世界の歴史との関連や比較において考え、さらに現代社会の諸問題を世界的な広い視野から理解していく態度を育成するという姿勢を打ち出した。それは、従来の自国史中心の歴史理解を脱し、広く世界的視野に立って日本の動きを世界の動きの中で捉えていくという新たな、しかも中学校教育独自の歴史教育の構想であった。そしてこの構想は、今日の国際化する社会を生きるために必要な態度、すなわち一方から世界を眺めるのではなく世界の中に自分を相対化し「ひとやものを」見たり考えたりする態度の育成を先取りするかのような先見性を持っていた。また生徒の歴史理解に見られる現代に至るまでの歴史の流れを日本史(Ⅱ内)と世界史(Ⅱ外)とに分け、「内」を中心に「外」を個別に捉えるという姿勢から内と外を関連や比較において考えさせ、

歴史的国際環境のなかで日本史を捉えていく姿勢へと向かわせるためにも有効な教育的構想とも言えた。

しかし、その後数次の学習指導要領改訂を経るなかで、この構想は大きく方向を変えていくこととなった。それは既に述べてきたように、世界史の内容の削減、とりわけ日本史に特に関係のないあるいは直接かかわりのない近代以前の世界史の削減であり、『98要領』を反映した教科書においては消滅に近いものとなった。

ここで確認しておきたいのは、学習指導要領における社会科および歴史的分野の「目標」は一貫して世界史を意識し日本の歴史を理解させるという方針があることである。それは「日本の歴史を世界史との関連や比較において考える態度の育成」、「わが国の歴史を世界的視野に立って正しく理解させる」といった表現から読み取れ、また『69要項』以降は先行する「目標」と比べ世界史の位置づけは後退したものの「わが国の歴史を世界の歴史を背景に理解させる」等の文言にその方針は見られる。さらに『89要領』では国際化社会を踏まえて、歴史的分野の具体目標に「わが国の文化と伝統の特色を広い視野に立って考えさせる」、「わが国と

諸外国の歴史や文化が相互に深く関わっていることを考えさせる」の文言を入れ、世界の歴史を背景に理解させようとする趣旨を改めて明らかにしようとした。中学校社会科歴史的分野は依然として日本史と世界史からなる教科内容を持ち続けているのである。

ところがこうした方針がありながら、一方で日本史に直接関わりのある、あるいは日本史の視野に入ってくる世界史関連事象だけを取り上げ日本史を理解させるという矛盾した方針を改訂の度に「指導上の留意点」等で打ち出してきた。しかも日本史と直接関係のない世界の動きは教えなくてもよいとするこうした論理についての明確な説明は学習指導要領からは読みとることができない。日本社会も国際化し、世界と自分のいる世界を対比しながら生きていくことは必要不可欠な時代となっているのであるが、歴史教育は日本史の視野に入ってくる世界史関連事象だけを重要視している。先に中学校と高校の世界史の情報量に関する不連続の実態について述べたが、不連続は中学校歴史教育の前近代と近代以降との間にも存在しているのである。

戦後の学習指導要領に見られる「日本に特に関係の深いことがら以外は、適当に大きくまと

めて学習させることが望ましい」（『58要領』指導上の留意事項）、「近代以前のイスラームとヨーロッパ世界の歴史は、ヨーロッパ世界とイスラーム世界のかかわり及びヨーロッパ人が来航した背景を中心に理解させるように留意する」（『89要領』内容の取り扱い）、「世界の歴史については、我が国の歴史を理解する際の背景として我が国の歴史と直接かかわる事柄を取り扱うにとどめること」（『98要領』内容の取り扱い）、という文言に示される『58要領』以降の論理は、明治時代の中等学校に関する「中学校令施行規則」に見られる「第五条 外国歴史ニ於テハ、……：我国ノ文化ニ関係アル事蹟ノ大要ヲ知ラシムヘシ」や、「中学校教授要目」の「教授上ノ注意」にある「五 外国歴史ハ特ニ我国ト関係アル事項ニ留意シテ之ヲ授クヘシ」という方針となぜか酷似している。この「中学校令施行規則」と「中学校教授要目」はそれぞれ明治34年と35年に公布されたものであるが、その年代は20世紀のまさに始まりの時期である。1世紀を経てもなお中学校歴史教育の世界史的内容を規定しているこの論理の根深さを改めて思い知る。この戦前、戦後の歴史教育の類似した方針の事実には2002年のある中学校歴史教科書から前近代のイス

ラーム世界や西ヨーロッパ世界が消滅してしまつた事実を重ね合わせると、「教育は国家百年の計」という言葉が妙に真実味を帯びてくる。まさに百年計画でイスラームや中世ヨーロッパ世界は消滅させられてしまつた感があるからだ。

はたして国際化が進行する社会において、前近代あるいは日本史と直接関係のない世界の動きを教えなくてもよいとする論理やその結果世界史的内容が削減された歴史教育の場合から、歴史的条件や価値観など様々に異なる他者と共存できる生徒の育成は可能なのだろうか。改めて中学校社会科歴史的分野が持つ相対的独自性を歴史教育担当者は認識し、世界史的視野に立って日本の歴史を同時代史として世界と比較、関連させていく歴史教育を構想、実践していくことが必要ではないか。歴史教育担当者が「日本と直接関係のない世界の動きは教えなくてもよい」とする論理に安易に与すればするほど、生徒は日本史を一国史的に発展してきたという認識で捉えてしまう。前近代の学習でこの傾向が強まれば、近代以降の学習においても世界史的内容は日本史と直接関係する知識獲得としか生徒には映らないだろう。

勿論、歴史教育担当者は歴史的国際環境を視

野に入れ、生徒が日本史もいくつかの局面において東アジア地域ないしはそれを越えた地域の中で成り立っているという理解ができるように日々実践に取り組んでいる。そしてそうした地道な実践は、生徒の歴史理解のなかに近代以前の日本の歩みも一国的に発展してきたのではないという見方や考え方を育ててきた。しかし、歴史教育から削減されるのは大きく括られ、そして消滅させられた時代や地域が増えていく状況は、徐々に生徒の世界観に何らかの影響を与えることは間違いない。それは自分達の基準で他の文化ないし世界を判断していく見方が生徒の世界像（歴史的・世界的も含め）を支配し、今後の世界認識に偏った価値観をもたらす危険性を持つていると言っている。ただイスラームの記述が比較的多く教科書にあつた1995年の筆者による中学生対象の簡単な歴史の見方考え方の調査では、「中東、イスラーム社会や歴史はわかりにくいものが多い」という質問に対し約80%の生徒が「そう思う」と答えている。また1997年の筆者による高校生対象の同じ調査では約71%の生徒が「そう思う」と答えている<sup>(5)</sup>。さらに2003年の首都圏の高校生1670名対象の調査<sup>(6)</sup>によると、イスラームのイメージと

して「理解しにくい」を選んだ者がキリスト教や仏教に比べ2倍以上多く、さらに「攻撃的で怖い」「得体が知れない」等、否定的なイメージを選んだ者も同様に多いという結果がでた。また「イスラム教に関して、小学校ないし中学校で学んだことがありますか」という質問には「きちんと学んだ」という回答は3%未満であった。（「少し学んだ」という回答は約55%。）ここに見られる数字の偏りは、歴史学習において教える側が忘れてきたものは何であつたかを如実に物語っていると云っている。生徒にとつてイスラームがわかりにくいのは、自戒をこめて言えば歴史教育がイスラームを避け、さらには日本の歴史と直接関係ないものと判断してしまつたからである。教育の姿勢は生徒の意識に反映し、それに基づいて常識が形づくられていく。一度身に付いた先入観からなかなか抜け出せないまま、生徒は「ひ・と・や・も・の」を見てそして考えていってしまうだろう。最近の教科書ではヨーロッパ世界の歴史は、ヨーロッパ人の日本来航から始まる構成になっている。そのことにより多くの生徒に歴史上、航海技術を開発、開発し発展させたのはヨーロッパの人々であるという誤解を生じさせやすい。それをそ

のままにしておけば、例えばインド航路発見はポルトガル人（ヴァスコ・ダ・ガマ）によって初めてなされたと思いきみ、その印象が強すぎるとガマ以前のインド洋には船一つ浮いていないという奇妙な世界観が登場してくる。イスラーム世界の記述が教科書にあった時期ですら、（大航海時代以前に）「イスラーム商人達は……中国、東南アジア、アフリカの産物を求めて、帆船でインド洋を乗り越え……」という記述、あるいは13世紀のマルコ・ポーロの帰路の図や中国明代の15世紀初め遠くアラビアやアフリカ東部まで艦隊を送ったという記述等<sup>(7)</sup>は歴史教育担当者が世界史を視野に入れた指導をしなければ、生徒の意識から欠落していつてしまうことは多くあった。現行の多くの教科書はその記述すらなくなっているのである。

歴史教育担当者は中学校社会科歴史的分野が本来持っていた日本と世界の歴史を関連、比較しながら考え、現代社会の諸問題を世界的な広い視野から理解していく態度の育成という構想を再認識し、それを国際化、グローバル化が進行する現代社会に生きる生徒の「ひとやもの」の見方・考え方を広げていくための指導

に生かしていくべきではないだろうか。そして多くの実践を集積し、それを高校世界史の実践の成果と結びつけ、情報を交換し、さらにその成果を共有し、中等教育前期・後期の世界史教育の相互交流ができる新たな実践研究の場を作り上げていくことが必要であると考える<sup>(8)</sup>。

筆者のささやかな実践を語らしていただければ、中学生といえども『日本書記』の660年7月16日の条にある「波斯（はし）」「ペルシア人」や850年頃作成されたイブン・フルダーズビフの『諸道諸国誌』に書かれた「シナの東方にあるワークワークの国」、あるいは900年頃成立した『竹取物語』中の天竺という言葉に、中東世界と日本との間の想像以上に古くからの交流や情報のつながりを見いだすことができると。それは新鮮な驚きとなり、生徒のもつ先入観をはずしていく。昨今の歴史研究は、密度の違いこそあれ遠い過去から人類は異なる地域間で接触交流し、新たな文化変容を遂げてきたことを、我々に明らかにしてくれる。歴史教育担当者は「文化的地域の内的な発展の歴史だけでなく、文化的地域間あるいは地域を横切る相互関係にも注意を払うべきである。文化や文明が自己完結的であることは、まれにしか

ないのである。」(Roupp, 1997) という言葉を真摯に受け止めて、歴史教室に向かうべきではないだろうか。前近代の日本も自己完結的な歴史をたどってははいないのである。

## 註

(1) 戦後、1955年(昭和30年)に至るまで、新制中学校社会科は幾つかの教科の教材を総合した「一般社会科」と、分化した社会科として「国史」(1951年「日本史」に名称変更)という2科目構造をとり、別個の指導計画を立て指導することが認められていた。しかし「日本史」は『55要領』において、社会科の指導計画の中に織り込まれ、社会科歴史的分野にその位置を占めた。

1955年に日本史と世界史を総合した社会科歴史的分野が成立した背景には、1947年に誕生した高校社会科世界史が十分に定着していない状況があった。その内容や方法を示した1951年の『中学校 高等学校 学習指導要領 社会科編Ⅲ(b) 世界史(試案)』が出された後も、高校現場では依然科目世界史は従前のように「東洋史」と「西洋史」に分けて教えられていることが多く、意欲的な世界史の実践も行われなかったが、世界史教育が十分その役割を果たすまでには至っていなかった。そこで世界史の定着を図るために、中学校から世界史の内容を学習させようとする施策が講じられたと考えられる。なお中学校の歴史学習に世界史的内容が導入されたことは、高校世界史の誕生期と同様に中学校現場にも

多くの実践上の課題を生じさせた。日本史と世界史を一つのものとして両者をどう関連づけるのか、あるいは世界史的内容をどのように取り扱ったらいのか、教科書の構成はどのようなものが有効か等、様々な課題が教育現場を悩ませた。この当時の状況については次の二つの論考が参考になる。

・鈴木 勇「社会科改訂における世界史の問題」(『信濃教育』第819号1955年 所収)

・後藤 勝「世界史教育の問題点」(歴史教育研究会編『歴史教育』第3号1957年 所収)

(2) 対象とする学習指導要領は現行社会科の三分野(地理、歴史、公民)制の枠組みが作られた1955年以降の学習指導要領とする。具体的には次の学習指導要領である。

・1955年(昭和30年)『中学校学習指導要領 社会科』

・1958年(昭和33年)告示、1962年(昭和37年)施行『中学校学習指導要領 社会科』

・1969年(昭和44年)告示、1972年(昭和47年)施行『中学校学習指導要領 社会科』

・1977年(昭和52年)告示、1981年(昭和56年)施行『中学校学習指導要領 社会科』

・1989年(平成元年)告示1993年(平成5年)施行『中学校学習指導要領 社会科』

・1998年(平成10年)告示、2002年(平成14年)施行『中学校学習指導要領 社会科』

・2003年(平成15年)『中学校学習指導要領 社会科』(一部改訂)

(3) 『58要領』指導上の留意事項(4)のこの箇所は、明らかに2年後の1960年告示の『高等学校

学習指導要領世界史A、世界史B』で構想される「文化圏学習」を意識している。それは『同世界史A、世界史B』の3指導計画作成および指導上の留意事項(3)の次の文言からも明らかである。

地理上の発見以前で、世界の諸地域が密接な関係をもちたない時期、たとえばヨーロッパの古代・中世にあたる時期において、一つの例として、ヨーロッパ、インド・西アジア、東アジアなどの文化圏別に、ある程度の大きなまとまりをもたせて学習させることも考えられる。(傍線筆者)

- (4) 中学校社会科歴史的分野教科書『新編 新しい社会 歴史』東京書籍2006年
- (5) 1995年の調査は公立中学校の3年生124名を対象とした。1997年の調査は公立高校の2年生91名を対象とした。
- (6) 松本高明「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正に向けた取り組み」(『日本中東学会年報AJAMES』 2006年 所収)
- (7) 中学校社会科歴史的分野教科書『新しい社会 歴史』東京書籍1993年の記述、解説図より。
- (8) 筆者の中学校と高等学校での実践経験から言えば、1994年から実施されてきた高校世界史A「諸文明の接触と交流」のような同時代的理解をめざす歴史教育が中学校でも可能であると考える。前近代の世界の学習で、2世紀世界(ローマ、漢、列島日本)、8世紀世界(イスラーム、唐、奈良平安)、13世紀世界(ヨーロッパ、モンゴル、鎌倉)という同時代的世界史は、高校での実践例を十分に参考にしながら、中学校でも実践を積み

重ねていくべきである。

### 主要参考文献

- ・ 鈴木 勇「社会科改訂における世界史の問題」(『信濃教育』819号 1955年 所収)
- ・ 後藤 勝「世界史教育の問題点」(歴史教育研究会編『歴史教育』第3号 1957年 所収)
- ・ 長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第六巻 1976年
- ・ 成瀬 治『世界史の意識と理論』岩波書店 1977年
- ・ 野村正七 他『中学校 新学習指導要領の開設と展開 社会編』教育出版 1977年
- ・ 奥田真丈監修『教科教育百年史』建吊社 1985年
- ・ 杉田英明『日本人の中東発見』東大出版会 1995年
- ・ 鈴木久男「中学校選択教科「社会」における世界史学習の研究」(更埴教育会『会報』第106号 1996年 所収)
- ・ 鈴木久男「歴史的過去は非国際化社会か?」(『研究誌『更埴』28号 2000年 所収)
- ・ 松本高明「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正に向けた取り組み」(『日本中東学会年報AJAMES』2006年 所収)
- ・ Roup, Heidi, 『TEACHING WORLD HISTORY』, 1997 New York
- ・ 中学校学習指導要領社会科 註(2)に掲載
- ・ 高等学校学習指導要領
- ・ 1956年(昭和31年)告示、施行『高等学校学習指導要領 社会科』世界史



- 1960年（昭和35年）告示、1963年（昭和38年）施行『高等学校学習指導要領 社会科』世界史A、B
- 1970年（昭和45年）告示、1973年（昭和48年）施行『高等学校学習指導要領 社会科』世界史
- 1978年（昭和53年）告示、1982年（昭和57年）施行『高等学校学習指導要領 社会科』世界史
- 1989年（平成元年）告示、1994年（平成6年）施行『高等学校学習指導要領 地理歴史科』世界史B
- 1999年（平成11年）告示、2003年（平成15年）施行『高等学校学習指導要領 地理歴史科』世界史A、B

2007年2月20日

（すずき ひさお 長野県 千曲市立屋代中学校教頭）



**編業・プロジェクト事務局**

〒186-8601 国立市中2-1  
一橋大学・東キャンパス  
マーキュリータワー5階3507室

URL: <http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/>

研究代表者：加藤 博  
一橋大学大学院経済学研究科教授

印刷：ゴトー印刷

---